

おまん狐

昔、下柱田村には、須賀川より今泉、そして深渡戸にゆく街道があり、その道筋に四ツ担原という淋しい野っ原があったそうだ。

そこに石祠があつて附近に、おまん婆さんが住んでいた。毎日と云つていいほど、おまん婆さんは卵や米などもつて石祠にお参りしてたと。狐は、それを見てはこちそうになつていたそうなの。

或る日、おまん婆さんが街道のそばの畑で仕事をしようとしたら、道はだて若いボデフリが腹でも痛いのか、うずくまっていた。

婆さんは「どつか悪いんだべ」と話した。

若い者は、「体じゆうが痛いんや」といったので、婆さんはこりや大変だと、わが家に連れていって薬湯を飲ませたり汗をふいたりして看病したら間もなく落ちついた。

しばらくして若い者は、「婆さん、よくなったぞい。世話になつたない」と帰ろうとしたので、婆さんは「一晩、泊つていかせい」と無理にもとめてやつたそうなの。

その後何年か過ぎた。おまん婆さんは年老いて天寿を全した。その時のボデフリも努力して、「のれん」をもつた商人となつたので婆さんに一目でもいい今の姿をみせたいと、礼をいいたいと、この地を訪れたが狐は、おまん婆さんに世話になつたので恩がえしと、婆さんに化けて、「あんときのボデフリさんかい立派になつたない。」と声をかけた。商人は、「丈夫でいなすつたなあ、おかげで一人前のあきんどになつたぞい。」と婆さんに世話になつたお陰だと涙を流したという。

狐も世話になつたことを思いだしたのか、ともに涙をながした。

その後、狐を誰言うともなくおまん狐と言つたそうなの。

